

令和7年度 大学における芸術家等育成事業

国際シンポジウム

「和紙と木版画：江戸・明治から現代、そして世界へ」

Washi and Printmaking: Edo-Meiji Legacies,
Contemporary Practice, Global Horizons

日時： 2026 年 2 月 20 日 (金) 12:30 - 17:30 (JST)

場所：立命館大学アート・リサーチセンター／オンライン (Zoom)

ZOOM: <https://ritsumeai-ac-jp.zoom.us/j/95445223588>

【Timetable】

12:00- 開 場

12:30- 開会の挨拶

赤間亮 (立命館大学 文学部 教授 / アートリ・サーチセンター センター長)

12:40- 基 調 講 演

12:40-13:30 Washi - the road to print

Rebecca Salter 氏 (英国ロイヤル・アカデミー・オブ・アーツ総裁)

13:30-14:20 『素材としての和紙』を国際市場から再定義する

森木 貴男氏 (株式会社 森木ペーパー・代表)

(休 憩)

14:30-15:00 版元が直面している和紙の現況

山田 博隆氏 (美術書出版株式会社芸艸堂 代表取締役社長)

15:00- パネルディスカッション「江戸・近代・現代の和紙」

パネリスト

湯浅 克俊氏 (木版画アーティスト)

藤田 飛鳥氏 (日本画家)

中山 誠人氏 (佐藤版画工房・木版画摺師)

平井 恭子氏 (佐藤版画工房・木版画摺師)

モデレーター

松葉 涼子 (立命館大学 文学部 教授)

17:30- 閉会の挨拶

(敬称略)

【会場 展示】

期間中、会場では「令和7年度 大学における芸術家等育成事業」に参加いただきました若手アーティストの方々の作品をはじめとする作品の展示会を開催しております。是非、会場へのご参加もお待ちしております。

国際シンポジウムについて

近年、国際的に活躍する日本人アーティストの創作においても、浮世絵の影響があらためて注目され、研究が進められています。本企画では、世界の第一線で活躍する現代日本美術の研究者・アーティストを招き、日本の木版画芸術がいかに現代美術と結びつき、新たな表現の可能性を切り開いているのか、その最前線を基調講演としてご紹介します。あわせて、日本と海外における和紙の流通や市場の現状についても考える機会とします。

さらに、現代の第一線で活躍する摺師によるプレゼンテーションを実施し、各地の和紙を使い分けることで生まれる木版画表現の違いと変化を、摺りの実演とディスカッションを通して具体的に示します。素材の選択が表現に与える影響を、現代の実践から読み解くと同時に、時代を超えて受け継がれてきた技法の変容にも触れます。

会期中には、本事業に参加するアーティストによる、本事業の成果や議論を踏まえた作品展示に加え、異なる和紙を用いて制作された作品の展示を同時開催します。これらの作品はデジタルアーカイブ化し、来年度以降にアーティストが本事業を通して得た知見をもとに制作する新作木版画と比較できる形で公開する予定です。作品表現や技法の変化を可視化するアーカイブの構築へとつなげていきます。

基調講演

レベッカ・ソルター氏（英国ロイヤル・アカデミー・オブ・アーツ総裁）

英国サセックス生まれ。ブリストル・ポリテクニック美術デザイン学部卒。1979年に来日し、京都市立芸術大学で2年間学んだのち、1985年まで日本で制作活動を行う。京都滞在中に版画家・黒崎彰に木版画を学び、日本美の理解を深めた。綿や麻などを用いた簡潔で繊細な平面作品で知られる。2019年、同アカデミー創設（1768年）以来初の女性総裁に就任。

森木 貴男氏（株式会社 森木ペーパー・代表）

東京を拠点に和紙専門の輸出商社・株式会社森木ペーパーを率いる三代目代表。伝統的な和紙の価値と可能性を国内外に発信し、職人や産地と連携しながら高品質な和紙を世界約50か国以上に提供している。修復用紙やアート用紙としての和紙活用を推進し、国際的な展示・講演にも携わる。

山田 博隆氏（美術書出版株式会社 芸艸堂・社長）

芸艸堂4代目。1994年同志社大学卒業し芸艸堂に入社。2010年代表取締役就任。京都版画出版協同組合理事長を兼任。芸艸堂は1891年に創業した美術出版社。美術工芸界向けに、習画帖、画集、図案参考本、写真集を出版。1918年に東京湯島に支店を開設。現在も木版印刷による出版を手掛けている。

パネルディスカッション

江戸から近代、そして現代に至るまで、和紙がどのように受け継がれ、変化し、再評価されてきたのかを多角的に議論します。歴史・技術・現代アートの各分野の専門家が、和紙の魅力と未来の可能性を語ります。

パネリスト 湯浅 克俊氏（NPO法人国際木版画協会日本委員会 副理事長、イメージメーカー）

デジタル写真を使用しながらも彫刻刀での彫りやばれんでの摺りなど、手を介した手法にこだわった木版画を制作。近年は和紙や墨、顔料など材料が持つ特性や文化を積極的に学び制作活動に活かしている。海外でのワークショップや滞在制作も多数行なっている。

藤田 飛鳥氏（絵描き Painter）

日本画と素材について考えています。画材の素を旅すると必ずそこにあるもの。単調に繰り返される音・リズム・身体性による没入感。人の暮らしと共にあった営みは、感謝や祈りの祭り事そのものであったと感じます。私の中で絵を描くことが自己表現にはならない理由のひとつであり、絵を描く理由のひとつです。また、画材の機能性を論じることは、私にとってあまり意味がありません。私は画材の研究をしているわけではなく、私が絵を描くために必要な素材に関わる人々と、共に生きようとしています。

中山 誠人氏（佐藤版画工房・木版画摺師）

熊本生まれ。京都精華大学美術学部卒。佐藤木版画工房にて摺師・佐藤景三に師事。国内外で展示・実演や教育的なワークショップを行い木版画の魅力を発信。復刻浮世絵から現代版画、小物まで幅広く手がける。令和元年度京都府伝統産業優秀技能者表彰を受彰。現在、文化庁選定技術保存団体・浮世絵木版画彫摺技術保存協会副理事・京都支部長。

平井 恭子氏（佐藤版画工房・木版画摺師）

大阪生まれ。京都精華大学美術学部版画専攻卒。1998年より摺師・佐藤景三に師事し、伝統的な木版画の摺り技術を習得。国際交流基金事業で各国の大学・美術館にて実演・ワークショップ講師を務める。2014年京もの認定工芸士（京版画）。現在、文化庁選定技術保存団体・浮世絵木版画彫摺技術保存協会京都支部理事、京都市立芸術大学および京都精華大学非常勤講師。

モデレーター 松葉 涼子氏（立命館大学 文学部 教授）

<お問い合わせ>

立命館大学アート・リサーチセンター 事務局まで